

る」と、述べた。

日本国民は独立を回復した時点では、多分に正氣を保っていた。

ところが、その後、国家にとつて、もつとも重要であるべき国防を、アメリカに丸投げして、アメリカの属国に甘んじているうちに、独立国としての氣概を失ってしまった。

今日の日本人は、「平和国家」であることを誇っているが、アメリカの施しによって、平和を謳歌^{おうか}している。

他人の施しによって、贅沢な生活をしている者が、暮しぶりを見せびらかしているようで、いやらしいとしかいえない。

これまで、私はしばしば日本外交の第一線に、立つてきた。

そのあいだ、左の人々だけでなく、保守派の人々からも、「アメリカのいう通りにならずに、自主外交を貫くように」という要望を、何回もきかされた。叱責されたといったほうが、よかった。

しかし、アメリカが強要した日本国というより、属国憲法を、有難く押し戴^{いた}きながら、「アメリカのいう通りになるな」と、よくいえるものだと、腹が立ったが、このような人々と議論しても、仕方がないと思つて、黙つていた。

第十章 日本人が成し遂げたこと

日本が人類史に果たした役割

九月が巡ってくる、東京湾に浮ぶ米戦艦『ミズーリ』号上で、降伏式典が催されてから、七十年目を迎える。

私の父・俊一は、重光葵全権に随行して参列した。

重光外相がマッカーサー元帥の前にしつらえられた机に置かれた降伏文書に、万涙を吞んで調印するすぐわきに、父が立っている。

その前夜に、母のか津が俊一を呼んで、「あなた、ここにお座りなさい」といった。

座ると、毅然とした態度で、「母はあなたを降伏の使節にするために、育てたつもりはありません」と叱って、「行かないで下さい」といった。

俊一は「お母様、どうしても、この手続きをしないと、日本が立ち行かなくなってしまうのです」と答えて、筋を追って恂恂と諷をあかした。

しかし、か津は納得しなかった。

「わたしには、どうしても耐えられないことです」といって立ち上がると、嗚咽しながら新しい下着を揃えてくれた。

私は中学に進んでから、父にミズーリ艦上で、どう思ったか、たずねた。

すると、父は「日本は戦いには敗れたけれども、数百年にわたって、奴隷のように虐げられていたアジアの民を、解放した。そういう歴史的な大きな、新しい時代を開いたという意味で、日本は勝ったという誇りを胸に秘めて、甲板を踏んだ。重光も、同じ考えだった」と、答えた。

甲板にあがった時に、小さな日の丸が七、八個、灰色の壁に描かれているのが、父の眼に入った。明らかに『ミズーリ』号が撃墜した特攻機を、表わしていた。すると、胸に熱いものが、込みあげた。だが、敵将の前で涙を見せてはなるまい。

父は「これほど、生涯で泣くのをこらえたことはなかった」と、語った。

私は『ミズーリ』号の甲板に立った父の悔しさと誇りをいだいて、成長した。そして、今日に至っている。

日本が大きな犠牲を払って、アジアが解放されると、その高波がアフリカ大陸も洗って、西洋の列強によって虐げられていたアフリカの民が、つぎつぎと独立していった。

日本は人類史で、大きな役割を果たした。今日の人種平等の世界は、日本が戦ったことによつて、創り出された。

日本人の心は壊れない

私は日本が八月十五日に戦争に敗れた時に、国民（小）学校の三年生だった。

十月二日に、母寿満子に連れられて疎開していた長野県から、東京に帰った。見渡すかぎり、焼け野原だった。

五月二十五日の大空襲で、四谷信濃町にあったわが家も焼失していた。

父は外務省北米課長として、進駐してきたアメリカ占領軍との折衝で忙しかったから、同じ信濃町にあった借家に、遅くなつてから戻ってきた。私は父に会うと、子供心に「東京がこんなに壊されてしまったけれど、日本はどうなるの？」とたずねた。

すると、父は「アメリカは日本中を壊すことができるが、日本人の心を壊すことはできない」といった。母も、凜としていた。母は父より十歳下で、三十二歳だった。母が遺した、当時の日記がある。

九月十四日に、「二三日前の新聞より毎日の様に戦争犯罪者としてリストをあげ、東條大將出頭を命ぜられ自決に失敗され、病院に入れられたり大変だが、同じ日本人としてお気の毒だ。
まきまき

益、ただただ圧迫を受け、よほどしっかりとした心の準備が必要と思ふ。唯、勝つ國、勝てなか

った國、人の魂までは、アメリカでも裁判出来ぬ。

アメリカは日本人を再教育せねばならないと、盛んにとなえてゐるが、第二の国民がつまらないアメリカ気風にかぶれたら、それこそ大変だ。私共の指導する責任は重い」と、記している。

「無条件降伏」へのすり替え

父は昭和二十九（一九五四）年に、鳩山一郎内閣のもとで外務省に戻つて、国連大使となつて、昭和三十一年に日本の国連加盟を実現した。

父は十一年前に百一歳で他界したが、私に日頃、「日本は無条件降伏しなかった」、「平和憲法」は、日本の平和をはかったものではない、「『国連』はたいへんな誤訳だ」と、語った。

敗戦から、今日まで七十年、このあいだ日本国民は、多くの大切な事実について、自分を騙してきた。

学校教科書も、先の大戦で日本が「無条件降伏」したと、教えている。

これは、事実ではない。日本は『ポツダム宣言』を受諾して、降伏した。

ところが、マッカーサーは日本を占領すると、日本が「無条件降伏」したことに、すり替えた。日本は軍という楯^{たて}を失っていたから、占領軍による凌辱に、甘んじるほかなかった。

連合国が日本全土を占領したのも、東京裁判によって、国家指導者を裁いたのも、『ポツダム宣言』に違反していた。

『ポツダム宣言』は「日本領域内の諸地点は吾等の茲^{こゝ}に指示する基本的目的の達成を確保するため占領せらるへし」(七項)と述べ、「吾等の俘虜を虐待せる者を含む一切の戦争犯罪人に対しては嚴重なる処罰加へらるへし」(十項)と要求して、戦場犯罪のみを、対象としていた。

日本政府は昭和二十七年(一九五二年)に、独立を回復してから、軍事占領下で「日本国憲法」が、国際法に違反して強要されたという事実について、ずっと口を噤^{つぶ}んできた。

「国際連合」は「連合国」

日本政府がもう一つ、自国民を騙してきた、重大なことがある。

ニューヨークのマンハッタンのイースト川^{リッパ}を見降ろして本部がたつ、正しくは「連合

国」と呼ばれる「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」を、意図的に「国際連合」と誤訳してきたことがある。

「国際連合」と誤訳することによって、日本国憲法と並んで、戦後の日本国民の世界観を、大きく歪めてきた。

今日でも「国際連合」と誤って呼ぶ、「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」は、日本がまだ連合国を相手にして、第二次大戦を戦っていた昭和二十(一九四五)年六月に、サンフランシスコにおいて創立された。

外務省が誤訳だと知りつつ、「国際連合憲章」と訳した「チャーター・オブ・ジ・ユナイテッド・ネーションズ」が、この時に、日本と戦っていた五十一ヶ国の原加盟国によって、調印された。

世界のなかで日本ほど国連に対する憧れが、強い国はない。ところが、困ったことに、「国際連合」という名の国際機構は、世界中どこを捜しても、存在していない。

今日でも「国連憲章」は、外務省による正訳によれば、「われら連合国の人民は……」と、始まっている。原文は「ウィー・ザ・ピープルズ・オブ・ジ・ユナイテッド・ネーションズ……」である。ここでは「連合国」と、正しく訳されている。

「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」が「連合国」と訳されているのに、「ザ・チャーター・オブ・ジ・ユナイテッド・ネーションズ」が、「国際連合憲章」と訳されている。翻訳に当たって、同じ言葉は同じように訳するのが、鉄則なのに、奇妙なことだ。

「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」の正しい名称は、「連合国」なのだ。

連合国の公用語である中国語では、「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」は「リエンヘイグワ連合国」だし、南北朝鮮も、「ヨナフグク連合国」と呼んでいる。

同じ敗戦国であるドイツでも、戦った相手である連合国と変わらない、「デイ・フェアインテ・ナツィオネン」（連合国）と、呼ばれている。イタリア語でも「レ・ナツィオニ・ウニテ」であって、「連合国」だ。

「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」という呼称が、連合国を指す言葉として採用されたのは、日本が真珠湾を攻撃した翌月の一日のことだった。

この日、日本、ドイツ、イタリアなどの枢軸諸国と戦っていた二十六ヶ国の代表がワシントンに集まって、「連合国宣言」を発した。

ルーズベルト大統領が、この会議において演説し、日本や、ドイツと戦っている同盟諸国を、「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」と呼ぼうと、提案したことによった。

日本は三年八ヶ月にわたって、「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」、すなわち連合国を敵として、戦ったのだった。

日本の都市に、国際法を蹂躪して絨毯爆撃を加えて、非戦闘員を大量に殺戮し、広島、長崎に原子爆弾を投下したのも、「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」——連合国の空軍だった。今日、日本で定着している「国際連合」という言葉を用いるなら、国連の空軍が、非人道きわまる爆撃を、加えたのだった。

「国連」が結成された時に、日本と戦っていることが、加盟資格とされた。

「国連憲章」第四条によって加盟資格について、「すべての平和愛好国」と規定されたが、昭和二十年三月一日までに、日本、ドイツなどの枢軸国に対して宣戦布告していることが、求められた。

「国連」は生まれからして、平和の国際機構ではなかった。そのために、今日に至るまで「コソノケンチャウ国連憲章」には、「敵国条項」が規定されている。

外務省も、朝日新聞をはじめとする新聞も、敗戦後の昭和二十年十月までは、「コソノケン国連」を「リエンヘイグ連合国」と正しく訳していたのに、「連合国」が「国際連合」にすり替わったのは、「リエンヘイグ連合国」と訳すると、国民がアメリカをはじめとする連合国に、敵意をいだきかねない

ために、外務省が戦前存在した「國際聯盟」をもじって、「國際聯合」と呼び替えたためだった。

都心の青山通りに面して、日本政府が多額の国税を投入して誘致した、「国連大学」の本部が聳^{そび}えている。だが、もし「連合国大学」であつたとしたら、誘致したものでろうか。全国各地に「国連協会」があつて、多くの善男善女が会員となっているが、「連合国協会」だったら、どうだろうか。

「連合国」を「國際連合」と誤って呼んできたために、本来、「連合国」と呼ぶべき^ゝ国連^をを、あたかも「平和の殿堂」のように崇^{あが}めている者が多い。

だが、日本を例外として、世界のどの国も「國際連合」を取り引きか、闘争の場としてみている。

言葉の呼び替えによる誤魔化し

敗戦後、敗戦を「終戦」、占領軍を「進駐軍」と呼び替えたのも、同じことだった。もつとも、日本では言い替えることによつて、本質を誤魔化^{ごまか}すことが行われてきた。

いまでも、宴会が終わる時には、^{げん}験を担いで「お開き」というし、明治に入るまでは四

つ足を口にしてはならなかったから、猪の肉を「山鯨」と呼び、兎を鳥とみなして、一羽、二羽と数えてきた。

徳川幕府が江戸を本拠地として、町づくりをするのに当たつて、吉原を遊郭地として定めた。もともと^{あし}輩が群生していたことから、^{あし}輩原と呼ばれていたが、^{あし}悪原に通じるので、^{げん}験を担いで、吉原に改めた。

もし、国連を正しく「連合国」と訳してきたとしたら、戦後の日本において国連信仰がひろまることは、なかったにちがいない。

日本は戦後七十年にわたつて、大切な言葉を^{もてあそ}弄んできた。そのために、戦時中に「退却」を「転進」と呼んできたのと同じように、現実から目隠^{めい}しするようにになった。

今日に至るまで、軍を「自衛隊」と呼んでいるのも、同じことである。国会で安保法制が審議されていることから、議員会館の前の歩道に、「憲法第九条を守れ」と書いた、プラカードを持った男女が立っているのに、出会う。

それほど第九条が素晴らしいものだったら、中東や、ウクライナへ出かけて、九条の崇高な精神を説くことを、奨めたい。

プラカードを手にした善男善女は、九条が「金^{きん}剛^{ごう}無欠」のものだと、固く信じているに

ちがない。

戦前、昭和十二（一九三七）年につくられた『愛国行進曲』に、「金毘無欠揺らぎなき、我が日本の誇りなれ」という歌詞があった。

だが、いったい、憲法第九条は全世界に向かつて、胸を張って誇れるものだろうか？

「平和憲法」と、誤って呼ばれているが、アメリカが占領下で、日本からいっさいの武装を解除して、日本を未来永劫にわたって属国とするために強要した、憲法の形を装った不平等条約である。

日本の包装文化

日本文化の大きな特徴の一つは、「包む」ことに、異常なまで執着してきたことだ。

東大卒であれば、八十、九十の爺さまになっても、「あの人は、東大出だ」といわれる。

高島屋の包装のほうが、「西武百貨店」の包装よりも、有難がられる。

御進物は中身よりも包装のほうが、立派なことが多い。

日本女性を包む着物は、世界のどの文化の衣よりも、贅沢なものだ。世界のなかで、もつとも金がかかっている。

日本の花嫁衣裳、歌舞伎の装束や、能衣装は、マリー・アントワネットたちがベルサイユ宮殿で纏ったドレスや、中国の歴代の皇妃たちの衣装を圧倒する、絢爛豪華なものだ。

つい、このあいだまでは、洋酒のジョニ黒や、輸入物のブランドーを貰うと、桐の箱に入っていたものだった。

富士山が、世界文化遺産に登録されたところ、登山者が急増した。群馬県の富岡製糸場が、世界文化遺産に登録されたが、それまではほとんど誰も訪れることがなかったのに、観光客が殺到するようになった。

日本は、包装文化なのだ。日本国民の多くが、日本国憲法が包装紙にすぎないのに、アメリカが日本を銃剣によって脅かして、強要したという、中身を見ようとしなない。

平和は祈ることや、念じることによって、もたらされない。平和は国民が努力して、創り出すものだ。

『六法全書』に記載されたアメリカ独立宣言文

議憲派の人々からは、昭和二十年に金毘無欠の日本を守るために、「一億総特攻」の掛け声のもとに、「神州不滅」を念じて、竹槍を持って本土決戦に備えたことを、連想させ

られる。多くの国民が神風が吹いて、日本が最後の勝利をおさめると、教えられていた。

九条という衣を脱ぎ去って、素っ裸になって、日本の行く末を考えてほしい。

日本国憲法は「平和憲法」と呼ばれて親しまれてきたが、日本が軍備を持つことを永久に禁じることによって、アメリカにとって日本が再び脅威となることを防ぐとともに、日本を属国とすることをもはかった、憲法を装った不平等条約である。日本を思い遣って、強要したものではない。

私は有斐閣の昭和四十七（一九七二）年初版の『六法全書』を、所有している。我妻栄東京大学教授が編集代表として、編纂したものだ。

日本が独立を回復してから二十年後に刊行されたもののなのに、なぜか、「憲法篇」の扉のページに、アメリカ独立宣言文が全文、英語と日本語で掲載されている。

「We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable Rights...」

「われわれは、次の真理を自明なものと考える。すなわち、すべての人間は、平等に造られている。彼らは、その造物主によって一定のゆずり渡すことのできない権利を与えられている……」から、始まるものだ。

アメリカ独立宣言は、アメリカ三代大統領となったトマス・ジェファソンが、起草したものだ。ジェファソンは南部の莊園主であり、奴隷主だった。「すべての人間」といっても、白人だけのことだ。

アメリカ独立宣言文は、ジェファソンが鞭打たれる黒人奴隷の悲鳴を聞きながら、書いたものだった。笑うべきではないか。

精神を重んじる国民性

父は初代国連大使をつとめ、新憲法のもとで外務省に奉職したから、国連が誤訳であるとか口にすることも、平和憲法を強く非難することも、できなかった。

私たちは精神を重んじるあまり、現実をよく見ようとしない、国民性がある。

武道という言葉をとると、英語をはじめとする外国語に訳することができない。英語で

いえば、「マーシャル・アーツ」であって、戦う術である。

私は空手道にかかわっているが、空手道、剣道、柔道、杖道じょうどうであれ、無心になることが求められる。勝ち負けに抱泥こうでいして、計算してはならない。空手はもとは中国のもので、唐手と書いたが、禪宗の「色即是空しきくはく」から、空手になった。

剣道では、宮本武蔵の『五輪書』に「斬り結ぶ太刀の下こそ地獄なれ。とびこんでみよ極楽」という、箴言^{しんげん}がある。柳生流には、無刀流さえある。弓道では「的を狙うな」と、教えられる。

日本では日本刀の形が、平安時代後期に定まってから、他に剣が存在していない。ところが、ヨーロッパ、中国、インド、イスラム世界でも、多くの種類の剣があつて、戦いの状況にあわせて、ゴルフにさまざまなドライバーや、アイアンがあるように、使い分ける。このごろでは、西洋人が武道に関心をもっているから、説明を求められることが多い。ところが、西洋人や、中国人には、勝ち負けに拘泥せず、生死を忘れて、無心になつて戦うべきことが、理解できない。

日本女性の和服は、世界のどこよりも高価で、華麗だ。

「着付け」という言葉も、外国諸語にない。日本では、衣の美しさや、着付けだけでなく、身のこなしが大切だ。着る人の心の働きが、何よりも問われる。

茶道、華道、書道から、香道まで、心が主役となる。

日本のような心の民は、世界に他にない。

ジョン・レノンが賞讃した神道

私は新年が明けると靖国神社を詣でる。この六、七年は、若い男女が多いのが心強い。

靖国神社といえば、ジョン・レノンについて、語りたい。

ジョンはヨーコとともに、靖国神社を参拝している。

私はジョンが、従姉の小野洋子——オノ・ヨーコ——の夫だったから、親しくなった。

小野は、私の母の旧姓である。

私がヨーコの一族のなかで、ジョンがはじめて会った者だったから、出会った時からすぐに打ち解けた。

ジョンとニューヨークや、東京で会って、マンハッタンの上空でUFOを見たとか、銀の棒を三本組み立てて、ピラミッドに見立てて、その下に野菜や、肉や、タバコを置くと、

「ピラミッド・パワー」によって味がよくなるといった、他愛のないことを話題にした。宗教や、芸術についても論じた。私は先の戦争は、日本がアメリカによって強いられて、

自存自衛のために、やむなく戦ったものだったと、話した。ジョンはヨーコとともに、ベトナム反戦運動の先頭に立っていたから、アメリカが他国に無法に戦争を強いることと、二重映しになったのだらう。

ジョンは、限りなく優しい人だった。私はこれほど優しい心をもった人と、親しくしたことがない。

ジョンは、日本のよき理解者だった。そして、神道に深く魅せられるようになった。

ジョンが、作詞作曲した『イマジン』が、全世界の若者の心をとらえて、大ヒットした。ヨーコと二人で書いたものだったが、一神教を否定していた。「天国も、地獄もないものと、想像してごらん」「宗教がなくなれば、全世界が平和になる」という歌詞のために、キリスト教界から、強い反撥^{はんぱつ}を招いた。

私はジョンに、神道には空のどこか高いところに天国があつて、大地の深い底のほうに地獄があるという、突飛な発想がないし、私たちにとっては、山や、森や、川や、海や、現世のすべてが天国で、人もその一部だから、自然は崇めるものであつて、汚^{けが}したり壊してはならないのだと、話した。

私は神道について説明した時に、イギリスの子供だったら誰でも知っている『クマのプーさん』を、例としてあげた。

小さなクマのプーは、ウィニー・ザ・プーとして知られている。さまざまな動物が棲^すんでいる、イギリスの森を舞台にした童話の主人公だ。プーは森のなかで、他の動物たちと

一緒になって冒険したり、仲間たちと楽しい日々を送っている。

森には、教会もない。プーと仲間たちにとって、森が天国である。

プーの森^{フー}では、動物たちもみな平等だ。まるで、神道の杜^{もり}のようだ。日本人にとっては、動物も、魚介類も、虫も、草木も、すべて仲間である。

ジョンはヨーコとともに、伊勢神宮も参拝している。

私がジョンに、キリスト教の「愛」が無条件ではないのに対して、日本の「和」はすべてを包み込むといったら、頷いた。

ジョンは週に何回か、日本語学校に通って、日本語を勉強していたが、口癖のように「オカゲサマ」が、世界のなかでもっとも美しい言葉だ」「このように素晴らしい言葉は、他にない」と、いった。

ノートに学んだ日本語を、ローマ字で書き込んだのに添えて、それぞれ、ユーモラスなペン画が描かれていた。私が褒めると、つぎに会った時に、黒い革表紙をつけて、「フォア・ディア・カズン・ヒデ」「ジョン」と署名して、贈ってくれた。

私は『イマジン』は、神道の世界を歌ったものだと思う。いま、世界は宗教対立によって、血を血で洗う抗争が絶えないが、神道の心があまねく

ひろまれば、人類が平和に共存できるはずである。

ある時、私が日本文化について講演をした際に、ジョンとヨーコが靖国神社を参拝したと述べたところ、若い女性から「ウッソー」といわれた。

私が「二人が社頭で撮った写真がありますよ」と答えると、不満げな表情で、「何かの間違いでしょう」といった。

写真は、二人が靖国神社を詣でた時に、AP通信が社頭で撮ったものである。このころのジョンは、まだ長髪だった。

特攻隊に現れた感謝の心

私は長いあいだ、どうして先の大戦中に一万人以上もの特攻隊員が、祖国のために進んで生命を犠牲にしたのだろうかと、答えを探してきた。

航空特攻、海上特攻、空挺特攻、水中特攻などを合わせると、一万人を超える。

食事の前と後に、「いただきます」「ごちそうさま」という言葉も、どこの外国語にもない。

お隣の韓国では、食前に「チャル・モッケスムニダ」（よく食べましょう）、食後に「チ

ヤル・モゴスムニダ」（よく食べました）、中国では「開始吃飯」（これから食べます）、満腹になったら「好吃飯了」（よく食べました）という。

ヨーロッパ人やアメリカ人なら、もとはフランス語だが、「ボン・アペティット」（よい食欲を）、食事が終わったら「アイ・エンジョイド」（楽しく食べました）という。

敬虔なキリスト教徒なら、食前に全能の唯一神に対して、短い感謝の祈りを唱える。自然や、先人や、いま生きている人々や、食材となる植物、動物、魚介類に、感謝するわけではない。

日本では、具体的に何を求めることなしに、「お世話になります」と挨拶する。つねに、感謝しあう文化なのだ。

キリスト教は、「愛の宗教」だといわれる。だが、キリスト教の「愛」は、私たちが日頃なじんでいるような、愛ではない。

キリスト教は、ユダヤ教を親として生まれたが、人が神を愛すれば、神が人を愛してくれるという、条件付きの愛だ。この神との約束を、「神との契約」と呼んでいる。

キリスト教は「旧約」と「新約」の二つの聖書から成り立っているが、ユダヤ教の唯一つの聖書を、神との古い約束である「旧約聖書」、イエス・キリスト生誕後の聖書を、神

との新しい約束である『新約聖書』として、分けている。

この神との契約は、キリスト教のもっとも基本的な教えであって、『旧約聖書』はユダヤ民族を「契約の民」と呼んでいる。キリスト教は全人類を相手にしており、信者はそれぞれ神と契約を結んでいる。

イスラム教も、「契約の宗教」であって、聖典『コーラン』とともに、ユダヤ教とキリスト教の聖書を、聖書としている。

私は妻から「愛している」といわれるよりも、「ありがとう」という美しい一言ひと言をかけられるほうが、心が和む。

私たちは神仏や、自然や、先祖や、親、隣人に感謝するたびに、心が満たされる。心は感謝するために、存在しているからだ。

日本人の信仰心は感謝する心に、もとづいている。

日本は、あらゆるものによって、自分が生かされていることに、感謝する文化なのだ。特定の対象ではなく、神仏、自然、国、国土、先祖、親を含む、身のまわりにあるすべてのものに感謝しているのだ。敗戦までは、天皇とか、国という言葉によって、要約されていた。

このような感謝の心が凝結して、世界史にも、他国にも類例のない、特攻隊になって現れたのだと思う。

感性を尺度にした日本人

靖国神社を、疎む者がいる。私にはどうして国を愛して、生命いのちを捧げた英霊を、愛することができないのか、理解できない。

世界に多くの国々があるが、日本だけが百二十五代にわたる御皇室を、戴かぶっている。皇室こそが、日本を日本たらしめている。

どうして、日本では建国以来、天皇がもっとも崇敬されるべき人であるとして、尊ばれてきたのだろうか？

神道は万物に神霊が、宿っているとすると、精霊信仰アニミズムである。世界の先進国のなかで、日本においてだけ、精霊信仰がいだかれている。皇室と神道は、同じ源みなもとから発している。

日本人は太古の昔から直感によって、万物に神霊が宿っていると、信じてきた。日本人は全宇宙が神聖だと、直感したのだった。

ところが、長いあいだ、神道には名前がなかった。神道という言葉が、日本語に加わっ

たのは、かなり最近のことで、日本の二番目に古い歴史書である『日本書紀』（西暦七二〇年）のなかに、はじめて現れる。

神道は日本が生まれた時から、存在してきたが、仏教が伝来すると、仏教と区別するために、「神道」と名づけられた。

仏教とともに、日本に中国大陸から、論理的な考えかたが入ってきた。

神道は直感によっているから、知性を働かせる論理と無縁である。そのために、神道には、仏教や、大陸から伝わった儒教とちがいが、今日にいたるまで、教典が存在していない。仏教と儒教は、日本が発展するのに当たって、大きく役立ってきた。仏教と神道は争うことなく、互に学びあつて混った。

中国や、ヨーロッパや、中東では、論理が直感を圧倒するようになったのに、日本では神道が今日まで、力をまったく失わなかった。

天皇が精神の王として、百二十五代にわたつて続き、神道がいまだに生きている。

西洋の宗教学者は、論理的な一神教を「高等宗教」として位置づけ、精霊信仰を「原始宗教」として、見下してきた。

中国や、ヨーロッパや、中東では、論理や、詭弁による争いが絶えることなく、論理を

用いて組み立てられた、善と悪を振りかざして、権力を争奪して、王朝が頻繁に交替した。

日本人は直感を大切にしてきたから、論理によって、支配されることがなかった。

日本では、人が身勝手に決めることができる善悪ではなく、何が清らかで美しいか、何が穢れて汚れているかという感性を、尺度としてきた。

神々も人民も平等な社会

天照大御神が最高神だが、中国の天帝や、ユダヤ・キリスト・イスラム教のように、宇宙を創造した、万能で、絶対的な権力を握っている至高神ではない。日本最古の歴史書である『古事記』（西暦七二二年）によれば、宇宙は神々によらずに、自らの力で、自成一つて誕生した。

中国神話によれば、半身蛇の女神が丁寧につくった人間が、地上の支配階級となり、ぞんざいにつくった者が、人民になった。

今日でも、中国は階級社会である。ヨーロッパにも、厳然とした階級の差別がある。アメリカでは、いまだに黒人に対する、不公平な差別が行われて、大きな社会問題となっている。

それに対して、日本は平等な社会であつてきた。神々も、地上にいる私たちも、均しく「みこと」とされている。

ルーズベルトが暗殺されていたら

歴史は振り返ってみると、不思議なものだと思う。

ルーズベルト大統領は、一九三二（昭和七）年の大統領選挙によって、選出された。現在、大統領の就任式が大統領選挙の翌年一月に挙行されるが、当時は翌年三月に行われていた。

ルーズベルトは一九三三年二月十五日に、大統領当選者として、休暇を過すために、フロリダ州マイアミを訪れていた。この日の夕方に、マイアミ市のベイフロント公園で、ルーズベルト次期大統領の歓迎会が催された。

公園の野外劇場に、七千人あまりの市民が詰めかけた。

この時、アントン・セルマク・シカゴ市長がルーズベルトに会うために、シカゴから会場にやつて来て、ルーズベルトの隣に立っていた。

ルーズベルトが短い演説を終えて、マイアミ市長にマイクを渡そうとした時に、五発の

銃声が響いた。

煉瓦工で、無政府主義者のジュゼーネ・ザンガラが、十メートル離れたところから、三十二口径拳銃によって、ルーズベルトを狙ったものだった。ところが、銃弾は奇跡的にルーズベルトに当たらず、セルマクの胸を貫いた。

セルマク市長は苦しい息のもとから、ルーズベルトに「大統領閣下、あなたでなくて、私でよかった」といった。セルマクはすぐに病院に搬送されたが、死んだ。

もし、ザンガラの銃弾がルーズベルトに命中して、ルーズベルトが死んでいたとすれば、翌月、副大統領当選者のジョン・ナンス・ガーナーが、第三十二代大統領として就任していた。

ガーナーは、アメリカが海外の戦争に捲き込まれてはならない、という信念に、凝り固まった、中立主義者だった。

もし、ルーズベルトが暗殺されて、ガーナーが大統領となっていたとしたら、日米戦争は起らなかったはずである。

おわりに

人類にとって二十世紀における最大の出来事は、人間の価値を肌の色で分けていた、「カラー・ライン」が消滅したことだった。

戦後七十年になるが、ワシントンから村山談話と河野談話を継承し、先の大戦に対する反省を繰り返すように、求められている。

ロシアは前大戦でナチス・ドイツを打倒したことしか、正義を主張できない。中国も周辺の人々を恫喝して、鼻摘みだ。いまの中国は先の大戦の戦勝国ではないが、軍国日本を屈服させたというしか、正義を騙れない。

では、アメリカはどうか。アメリカは「世界で自分たちのアメリカがもっとも正しい」という正義を振り翳して、世界をアメリカ化しようとしている。

アメリカも先の大戦で、アメリカが正義であったことを証したいのだ。だが、アメリカが日本だけに先の大戦についての反省を求めるのは、筋違いもはなはだしい。

日本は自存自衛のために、正義の戦いを強いられたのであって、百歩譲ったとして、ア

アメリカも反省すべきではないか。

安倍首相が自衛隊を「軍」といったら、国会で叩かれている。

だが、吉田首相が日本の独立回復から三ヶ月後の昭和二十七年七月三十一日に、「保安隊は新国軍の土台となる任務を持つ」と、述べた時は、国会で問題とならなかった。

吉田首相は翌年十一月三日に、衆院予算委員会において、「自衛隊は戦力なき軍隊だ」と発言したが、野党が揚げ足をとることはなかった。

また、女性議員が「八紘一宇」といったところ、国会で叩かれている。いつ、日本の国会は韓国の国会となったのか。

「八紘一宇」は、『日本書紀』にでてくる言葉だ。『日本書紀』がけしからんと、いうのか。昭和三十一年三月八日に、鳩山内閣の重光葵外相が参院予算委員会で、「太平洋戦争によって、日本は東南アジア諸国の独立に貢献した」と、述べた。

昭和四十九年一月二十四日に、田中角栄首相は「日本の朝鮮半島統治は、韓国民には有益だった」と、発言した。国会でも国内でも、まったく異論がなかった。

日本は戦争の記憶が風化するに従って、正気を失うようになっていく。

天皇皇后両陛下が、四月にパラオに行幸啓された。海上保安庁の巡視船にお泊りになら

れたが、なぜ、海上自衛隊の護衛艦をお召艦とすることができないのか。

陸海空自衛隊には「総理大臣旗」があるのに、「天皇旗」がない。どうして「総理大臣旗」があつて、「天皇旗」があつてはならないのか。

私はこの問いに、答えられる。日本が国でないからだ。多くの心ない日本人が、「平和憲法」を後生大事にしている。正しくいえば、「属国憲法」だ。「軍」を「自衛隊」といつているのも、「属国」を「平和」といい替えてきたのも、同じ亡国根性によるものだ。

本書を上梓するのに当たって、KKベストセラーズの渡邊勇樹氏にお世話になったことを、感謝したい。

加瀬英明